巻頭言路

役員改選を終えて

理事　谷　徹

６月に執り行われた総会において会員園の皆様にご承認いただき、今期も継続して理事を務めさせていただきます。この協会も団体統一からかれこれ10余年の月日が流れ、理事関係者の顔ぶれも少しずつ変わってきました。まだ男性の理事が多く、女性の理事が少なかった時期にご尽力されてきた女性の大先輩、また、私自身をこの業界で育てていただいた大恩人も、この理事会の一線から退かれました。バトンを渡された私たちは、どれほどその先人たちに追いつけますでしょうか…。

私自身、団体統一から現在に至るまで、いとまなくサポートしてきた自負がありながら、現在の団体の有り様に疑念がないわけではありません。溜飲が下がらないでいる原因の中の大きな点は、今回の役員改選においてだいぶ緩和されてきましたが、まだ決して十分とはいえないことがあります。それは民保協が、都内23区26市５町８村、すべての意見・要望を十分にサポートするまでには至っていないということです。本来団体は弱者に手を差し伸べるべきものですが、ややもすると、自分や自分の所属する小社会のみの福利を願う利己的な組織になりかねない可能性があり、それは、本来の協会が目指す姿ではないと感じています。そのような危うい立ち位置から少しでも乖離できるよう、今回の役員改選では女性の理事登用も着実に増え、新しい顔ぶれもだいぶ参画されたように見えます。

しかし、それでもまだ足りないのです。東京は小さな面積の中に日本一人口も多く、密度も高いエリアで、いわば人種の坩堝です。限られた小さな社会の中だけで意見を取りまとめることは簡単なことです。しかし、多様な意見や要望のあるこの東京で、どんな小さな声も吸い上げていくのが協会本来の使命だと思っています。私は、各地区の代表者の園長先生は、例えるなら理事会における評議員的な立場であっていただきたいと思っており、皆様から理事会に対して、地域の抱える問題を背景とした積極的なご意見、ご要望をお寄せいただきたいと考えております。

現在（原稿執筆は７月）、コロナ禍においてワクチン接種は遅々としており、マスコミが喧伝するほど進んでいる感じがしません。６月30日をもって効用期限の切れるワクチンは単純に捨てられてしまったのでしょうか。キャンセルが出たもの、余ってしまったものを優先的に福祉職に接種したのでしょうか。感染するかもしれない、感染させてしまうかもしれない、その恐怖の中で保育者たちは業務に従事し社会に貢献することを求められています。いま、未曾有の危機の中、業務に邁進されている全ての保育者のために、各地域の園長先生方には、東京都民間保育園協会の理事と同じ土俵に上がっていただき、さらに成果のある議論を交わせる団体に成熟されるように、今後ともご指導ご鞭撻をいただければと思っております。